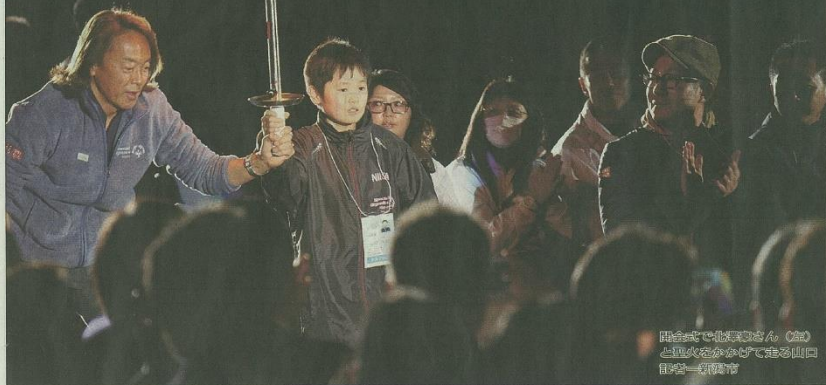


輝く聖火と金メダル



山口大輔記者 (南魚沼市立総合支援学校小学部5年)

SJOの開催式で、トーチ(聖火)ランをするに決まるときの、なかなかできない役だから、とてもうれしかったです。トーチランでは、花輪さんと一緒に走り回りました。花輪さんは、元サッカー選手で日本代表にも選ばれた人だということを知って、おどろきました。トーチランは、火が近くにあったら怖いけれど、何とかやりきることができました。ほくは、トーチランのほかにはスノーシューイングの選手として

も参加しました。13日の予選では、「途中で転んだらどうしよう」と思い、朝之飯も食べられないほど緊張していました。でも、競技が始まると一生懸命走り出しました。結果は1位、「この調子で決勝もがんばろう」と思いました。次の日の決勝では、予選ほど緊張しませんでした。同じように一生懸命走り、1位でゴールすることができました。表彰式で、ずっしりと重い金メダルが首にかけられると、とてもうれしくて「よっしゃー」と思いました。

佐藤大輔選手(中央)に取材した井口記者(左)＝南魚沼市



重ねた努力、すべりにこめて

■井口真梨記者 (旭小6年) 私は雪山支局の記者として、アルペンスキー競技を取材しました。知的障害のある選手のみながプロの選手と同じように、すごい勢いで滑っていました。宮崎県代表の佐藤大輔選手(35歳)は「クラウチング(前かがみ)の姿勢でスピードをつけて、風を切って滑ることがとても楽しい」とスキーの魅力を話してくれました。私もスキーをやっています。「楽しさは同じなんだ」と強く感じました。誰にも自分の夢や無限の可能性がありま。知的障害のある人に偏見をもつ人もいますが、それはちがいます。SJOでの選手のみなさんは、大会スローガン「トキめけ キラめけ 力いっぱい 心いっぱい」通りに滑っていました。がんばる姿は、多くの人に感動を与えます。選手のみなさんには来年の世界大会をめざし、日本の代表としてますすががんばってほしいと思います。

■小澤日真梨記者 (三用小6年) 私たちのクラスでは、アスリートの角谷真人さんとお話を聞きました。おどろいたことは、角谷さんが滑きなから練習しているということです。きっと仕事でつかれた後でも練習をがんばったので金メダルをとったのだと思います。大会事務局の谷口博文さんのお話は「あるがままに」という言葉が心に残りました。知的障害のある人とう話したり、遊んだりしていく方がありませんでしたが、この言葉を聞いて、あるがままがいいんだと安心しました。私は、結果だけで評価するのではなく、一人ひとりの努力の過程を評価するSJOでいいなあと思いました。と同時に、オリンピックやパラリンピックの選手と同じことが言えるのではないかと思います。



応援して、勇気をもった



クロスカントリースキー競技の前進をした五日町小の6年生＝南魚沼市

コースの安全を点検

■山本和史記者 (五日町小6年) 会場の五日町スキー場は地元なので、ぼくたち五日町小6年生は、クロスカントリースキー競技の前進のボランティアをするにになりました。前進は、アスリート(選手)がコースをすべる前に、コースの異常がないかを確かめる役目。競技開始10分前にスタートします。ぼくは注意深くコースを歩きましたが、1キロはあっという間に終了しました。前走が終わると、いよいよアスリートたちによる競技が始まります。「こんなに上手に滑ることができるんだ。ぼくはおどろきました。練習がある人たちのすべりが、とても上手だったからです。「速い!」ぼくもクロスカントリースキーのジュニアチームに入り、週に数回の練習をしています。大会に出場して上位に入ったこともあります。アスリートたちは、そんなぼくよりも明らかに速いです。アスリートたちが競技をする姿を見て、ぼくは自然と大きな声で応援していました。「ガンバ! ガンバ!」。まわりの練習の応援も白熱していました。アスリートがフィニッシュしてくると感動しました。その姿を見て、ぼくはさらに一生懸命にクロスカントリースキーの練習をして技術力を上げていこうと思いました。

選手の意気こみに圧倒

■堀江結記者 (旭小6年) スノーシューイング会場に取材に行くに、多くの選手が集まってじっくりと準備運動をしていました。競技開始の時刻が近づくと、順番を待つ選手の顔にあせりと緊張が見て取れました。予選終了後、山口大輔選手に取材しました。この大会に出場したきっかけはお母さんがすすめてくれたからでしたが、練習するうちにスノーシューイングの楽しさに気づいたそうです。決勝への意気こみを聞くに「必ず1位になりたい」と力強く答えてくれました。その迫力に、私はすっかり圧倒されました。取材を通して、スポーツは人の気持ちの強さ、やる気を引き出す素晴らしいものだと感じることができました。



山口選手にインタビューする堀江記者(左)＝南魚沼市

次は選手として参加!

■長尾幸記者 (市立総合支援学校小学部5年) 友だちの山口大輔さんがスノーシューをはいって、切り走っていました。「ガンバルー」と大きな声で応援しました。大輔さんは1番でゴールしてすごいと思いました。おもてなし交流会でダンスをしました。大きな声と大きな動きでおどりました。飛行機みたいなジャンプしたことが心に残っています。ペアの上村龍心さん(8年)も笑っておどっていました。おうちの人もお客さんたちも私たちがたいに元気になったと思います。閉会式にもおうちの人もいっしょに行きました。中学部の音楽が「Good(すてき)」でした。アスリートのみんなもステージに上がったてで、一着目の写真、アスリートが会場から出てくると、学校の先生たちやたくさんのおうちに拍手で見送られていました。「イエーイ!」と言って笑顔で帰っていました。おうちでお母さんと「今度はアスリートとして参加できたらいいね」と話しました。私も見ていただけじゃなくてアスリートとしてSJOに参加したいと思いました。

鼓笛隊の演奏で歓迎

■五十嵐智希記者 (五日町小6年) ぼくたちはSJOの交流活動に五日町小学校鼓笛隊として参加しました。鼓笛がアスリートのみなさんにどう評価されるか心配で、とても不安の多い演奏スタート。ぼくは自分でも心臓が跳つているのがわかりましたが、敬礼をすませて指揮台に上がりました。1曲目はドラムマーチから続けて「練習は続くよどこまでも」を演奏。ぼくは、腕の痛みをまんしながら指揮棒を振り続けました。自立つみはなく、会場は拍手でいっぱいになりました。自信があった五日町小学校の歌は、自分でもおどろくほど手がふるえて緊張しましたが、みごと成功。会場はすこもりのあがりでした。クラスメートも生き生きしているのがよくわかり、その姿を見て、ぼくも自分に自信が持てました。「五日町音頭」そして最終曲の「ルパン三世のテーマ」が始まると、腕の痛みもピークに達しましたが、全力を出しました。アスリートのみなさんと親交を深めることができ、良い体験となりました。演奏後の拍手は今でも忘れられません。



本巻小のおにぎり配布台と、堀江記者が配ったおにぎり

おにぎりとお米でおもてなし

■宮崎萌記者 (大巻小5年) 気持ち大きくなることができました。高橋ゆら記者(旭小5年) 私たち5年生は、総合学習の時間に、日本一おいしいお米「魚沼コシヒカリ」を学校の水田で作りました。SJOで全国から参加する選手やコーチ、そして家族のみなさんにお米をプレゼントしたら、南魚沼のことを知ってもらえることができるし、おもてなしになるのではないかと考えました。みんなでお米をこめて袋に詰め、応援メッセージを書いた手紙を入れました。全部で491人分のお米を用意しました。大会当日、私は「大会が終わって家に帰ったときに、私たちがお米をおいしく食べてくれるように」と願ってました。お米を受け取った家族の方が「ありがとう。選手がとてても喜びます」と言ってくれました。選手の方は「小学生が作ってくれたお米がもらえるなんて、とてもうれしいです」と笑顔で受け取ってくれました。



本巻小のミニクライミング大会の様子

地元の木材ではし作り

■鈴木紅葉記者、桑原温記者、大平桃香記者、林愛穂記者 (五十沢小6年) 五十沢小では、1~5年生が福満選手団へのプレゼントを作りました。1、2年生はメッセージカード、3、4年生は「選手に役に立つもの」とペットボトルプレートです。5年生は、はしはし作りをしました。五十沢地域の木から、自分たちで削ってはしを作りました。はしには、南魚沼市の名物「きりざいし」の作り方を書いてあります。きりざいは、野菜や漬物を細かく切って粕漬というしよに混ぜる食べ物です。みんなの思いが選手たちに届いて、力になれるといいです。

がんばったお手伝い

■石田沙樹記者 (三用小4年) 私たち4年生は、大会前日に会場づくりのお手伝いに行きました。選手やボランティアが休憩するテント内の畳を平らにし、板とビニールシートを敷きました。畳を平らにするのは意外と大変で、シャベルでこぼしたところをけずったり、穴が開いているところに畳を持ってきて埋めたりしました。選手のみなさんが転ばないようにするため、みんな一生懸命がんばりました。通路もおしりました。でこぼこしているところを見つけてスノーダンプやシャベルで平らにしてみました。すごくかたくて手がいたくなりました。でも、あきらめずに何度も削って、やっと平らになりました。そのときはとてもうれしかったです。選手も楽しんでくれて、シャベルが役に立ち、選手のみなさんが全力を出して笑顔になったのだとしたら、とてもうれしいです。■鈴木紅葉記者、桑原温記者、大平桃香記者 (五十沢小6年) 私たち五十沢小6年生は、大会の1週間前に五日町スキー場にある「五日町雪国スポーツ館」で会場準備のボランティアをしました。体育館にビニールシートを敷くことと荷物の運搬をしました。参加者が靴をはいたまま会場に入っても床がぬれないように頻りにビニールシートを敷き、水がたらないようにガムテープでとめました。そして、届けられていた荷物を福満選手団に運びました。活動自体は1時間程度で終わりましたが、とても楽しく、自分たちのやるべきことをしっかりとやっという達成感がありました。

南魚沼 SJO オリンピックス 新聞



2017 朝小50周年 プロジェクト

里山支局 だより 山支局

◆この特集は、小学生の発行を応援する「朝日小学生新聞50周年プロジェクト」の一つです。新潟県南魚沼市立の小学校、総合支援学校のみなさんが「南魚沼里山支局」の記者として、取材・執筆しました。

SJO なるほどね! 1 ストリアで開かれる世界大会の選手たちも兼ね、里山から集まる約600人の選手たちが7競技3日間で戦いました。アルペンスキー、雪の斜面をスキーですべり下る競技です。クロスカントリースキー、スキーをはいて、雪の積もった野山や平原を走る競技です。スノーシューイング「雪下ろし」も呼ばれる歩行器具をつけて、雪を走ります。